

第14回 東京女子医大漢方医学研究会

日 時 昭和62年3月11日(水)午後5時30分～7時

場 所 東京女子医大消化器病センター2F カンファレンスルーム

一般演題

1. 舌痛症の漢方治療経験 (歯科・口腔外科) ○河奈 文彦・安藤 智博・竹内 徹・扇内 秀樹
2. 小児気管支喘息に対する柴朴湯の使用経験 (第二病院小児科) ○橋本 節子・本城美智恵・木藤香代子・小泉真理子・村田 光範

特別講演

- 免疫薬理活性を中心とした漢方薬理 (北里研究所付属東洋医学総合研究所研究部長) 丁 宗鉄
当番世話人 野本 照子

1. 舌痛症の漢方治療経験

(歯科・口腔外科) 河奈 文彦・安藤 智博・
竹内 徹・扇内 秀樹

舌痛症は舌に明らかな器質的变化を認めないにもかかわらず持続的で自発性の疼痛を訴える病態を示し、臨床的には確かに疼痛が存在していても病理的所見が得られにくく、本態はいまだに不明の点が多い疾患である。

口腔外科臨床では外来初診患者のほぼ1%といわれ、近年の複雑な社会構造および人間関係によるストレスの増加と共に舌痛症患者も増加傾向にあるとされている。

舌痛を来す原因は多様で、局所的・全身の原因が証明されない症例には、いまだ有効な治療法が確立されていない。こうしたいわゆる舌痛症には心身医学的アプローチや向精神薬が用いられているが、今回我々は西洋医学に無い中医学の病因論に着目し漢方薬を舌痛症に応用して若干の経験を得たので報告した。

2. 小児気管支喘息に対する柴朴湯の使用経験

(第二病院小児科)

○橋本 節子・本城美智恵・
木藤香代子・村田 光範

今回、私共は当院アレルギー外来通院中の気管支喘息患児に柴朴湯の使用経験を得たので、その治療成績を文献的考察を加え、簡単に報告した。

対象は20症例で、年齢は11～24歳の男性11名、女性9名で、この中、重症度では軽症5名、中等症15名で、また病型ではアトピー型16名、混合型4名であった。証による考慮はせず、軽症例は咽喉頭部異常感や頭痛等の不定愁訴のある例に用い、中等症は抗アレルギー

剤、DSCG 吸入療法施行の他、テオフィリンによるRTC療法が中止できない例に用いた。全例に柴朴湯1日5grを投与し、2カ月～13カ月間使用した。症状改善度は、喘息日記から臨床症状を5段階に評価した。著明改善1名、改善10名、軽度改善9名で改善率100%と良好な成績が得られた。またアトピー型に有効率が高かった。しかし、特に著効を示した13歳女児例を呈示したが、通年性混合型で扁桃炎、気管支炎に反復罹患し、小～中発作を頻発していたが、柴朴湯投与後、これらの症状は全く消失した。柴朴湯は、梅里、飯倉らのラットを用いたPCA効果をみた実験から、I型アレルギーを抑制し、現在の抗アレルギー剤に匹敵すると報告されている。諸家の成績でも、その有用度は60～70%と報告され、気管支喘息治療に有用性を認めている。また今回の軽症例で不定愁訴の消失がみられた事から年長児の心因的要因の強い喘息例に有効と考えられた。

特別講演 免疫薬理活性を中心とした漢方薬理

(北里研究所付属東洋医学総合研究所)

丁 宗鉄

西洋医学のレベルでは世界の最高水準に達した今日の日本において、動物実験や比較臨床試験によらずに開発されてきた伝統医薬である漢方薬が再認識されつつある。一度は日本から失われかけた漢方薬を再登場させた原動力の一つにその成分と薬理に関する研究成果が挙げられる。

生薬中の含有量が高く安定な物質についての研究が主であった頃は、成分や薬理の研究は漢方薬の効果と結びつかないため、ともすれば漢方薬を否定する側に立つ場合さえあった。しかしながら第二次世界大戦後